

さいろのはた
とある
192

むに 小林605
無二 2156 2,158 P

うなむ 領く 203 一目瞭然 2126
假校 大ナ 135 さい 626 281-2
盟友 小ナ 179 2160 のホ, 2170 2421

魏志倭人伝 下賜記事の癖
魏志倭人伝には、次のようにい
「其の六年（二四五）詔して倭の難升米
に黄幢（軍旗）を賜い、郡（帯方郡）に付し
て假授せしむ」魏国の黄色い
式いは、難升米が強調する説示に大いに領
くところがあつたからであらうか。
ともあれ、
へ魏国の朝廷は、この多難な時に東海海中
の倭国が離反するのを恐れ、倭国を無二の
盟友としておく爲に、一目瞭然、兩國
の深い絆を表わすものとして、黄幢（軍旗）を、
帯方郡の名目で、倭国に賜う
こととしたのであらう。
と思われ。
もつとも、魏国の象徴というべき黄色の
「なぜ魏国は、黄幢（軍旗）を、倭国の女
王にでなく、倭国の大夫難升米に賜わつた
のであらうか」といふ疑問が生じる。
（「ニンポジウム邪馬
台国」石井良助、創文社二八三頁参照）

2,159

1423-1/2
15
16

なるほど一見、すいぶん異様な感がある。
とはいえ、――も、――か、――たら、次のよ
うに解すべきなのかも知れない。
□すでに述べたが、魏文倭人伝中の景初三年
条、および正始元年（二四〇）条を見よう。
なからもう一度引き写してみよう。
①景初二年（実は三年）条に、
「其の年（景初三年）十二月、詔書して倭
の女王に報じて曰く、――（中略）――女（卑彌
呼）を以て親魏倭王と爲し、金印紫綬を假
し、装封し、帯方の太守に付して假授せしむ。
――（中略）――今、経地交龍錦五匹、経地
十張、舊絳五十匹、紺青五十匹を以て、汝
加献する所の貢直に答う。又特に汝に紺地句
文錦三匹、細班華罽五張、白緝五十匹、金八
両、五尺刀二口、銅鏡百枚、眞珠、鈴丹各々
五十斤を賜い、皆装封して、難升米・牛利に
付す。」
と記載されている（第十八章「朝貢の儀」の項。他において既述
）。
これらの下賜品は、この詔書に明確に、
「皆装封して、難升米・牛利に付す」
と記されている。さらに丁重な手続きを踏んで倭国へもたらすは、

数え初めに51?
せいの出現29?
小林行雄

⑤1678¹⁴²³

2,160^{1423-1/2}

④1414^{1423-1/2}

④2159^{1423-1/2}

④2170^{1423-1/2}
④2158と同文

二頁の
のだった。

た。

翌年の

すなわち、正始元年条に、

「正始元年（二四〇）、太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣り、倭王に拝賀し、ならびに詔をもたらし、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す」とあるのがその実情であった。

・これによれば、倭国が魏国へ朝貢した年の翌年の正始元年（二四〇）に、帯方郡太守の使者が、魏帝の詔書や下賜品を倭国まで運んできたことになった。

・おそらく、難升米たちも、これに同行して帰国したのであろう。（第十九章八帯方郡太守弓遵の項において既述）

②弓遵のこの例と全く同様のことが、正始六年条（二四五）のおよび正始八年条（二四七）の下賜記事についてとも言えるように想到される。

①まず、正始六年条に、

「其の六年（二四五）、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし」

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむし

賜 1079 慌 1079
勅命 1461 2142P
2070P 2181P

2161P 2142P 1423-1/2

天のき改行

とあり、あたかも魏国は黄幢（軍旗）を倭
国の女王に下はなく、倭国の大夫難千米に賜
ったかのようにも読める。
② 一かゝ實際には、さらに丁重な手続を踏ん
で、翌正始七年（二四六）倭国の女王へもた
らされるべきだと考えられたに違いない。
・ ところか、先述のハタのように、帯方郡太守ろ
連にとつて、正始七・八年は多難な年であつた。
・ 韓族の臣智がその地の人々の怒りをあおり
立て、帯方郡の崎離堂へ兵營の名か）に政
撃をかけた。こゝに對し、帯方郡太守のろ
連と梨琅郡太守の劉茂とは、兵をおこして征
討を行なつた。
・ 帯方郡太守ろ連はこの激烈をきかめた戦いの最
中戦死することになる。（第三十二章へ朝鮮
半島の混迷の歴史の項において既述）
・ このような慌しい時であつたから、魏国の
天子の詔（勅命）といえども、帯方郡太守
ろ連は、使者を遣わして、黄幢を倭王にもた
らすことが出来なかつたのであろう。
・ 朝鮮半島の情勢が落ち着くまで、黄幢の賜

5P 2156P

「とろが」
前頁

三国志正統
213? 398? 上中巻
2139? 2142末 2162
2170? 同又

三国志(正)巻303左下
2142末 2162
2139? 2142末 2162

「とろが」 2165-3/2

纂忙 = 煥忙 1843? (正) 2159P

2160
2170? 同又

ある。

歴史には時として皮肉な一面が

と思った。

早速にも、黄幢を倭王に
倭授せねばならない

の太守であつた王頎が
帯方郡太守の任

戦死した帯方郡太守弓
渾の後任として、玄菟

郡と楽浪郡の二郡の軍は、
結局、韓を亡ぼし

は鎮静された。弓渾は戦死
したが、帯方

郡と楽浪郡の二郡の軍は、
結局、韓を亡ぼし

とはいうものの、その後
やがて、朝鮮半島の混

乱は鎮静された。弓渾は
戦死したが、帯方

郡と楽浪郡の二郡の軍は、
結局、韓を亡ぼし

とはいうものの、その後
やがて、朝鮮半島の混

乱は鎮静された。弓渾は
戦死したが、帯方

郡と楽浪郡の二郡の軍は、
結局、韓を亡ぼし

とはいうものの、その後
やがて、朝鮮半島の混

乱は鎮静された。弓渾は
戦死したが、帯方

魏志倭83P

②165¹/₂同文

②181²/₃ 2163^P

②2165¹/₂

魏志倭52^P注2

紀元102^P

ガキ
三敷化2684
はサ1くまふと

②169^P二の後 月読の神

ように

この頃（正始八年頃）は、倭国の女王卑彌呼に
呼びとつて、大變な時であつた。
倭の女王卑彌呼（つまり倭国）と、東方
の倭国（南の狗奴国）ではあるまい）
とが和せず、その戦いは激化していった。
いかもそれだけでなく、記紀にのるさへて
卑彌呼（素）（男弟である彦命の素戔
鳴命）とが和せず、倭国国内が波乱状態にあ
つた。
ようである。と考えられる。
なお、魏志倭人伝の正始八年条には、次の
ように記されてゐる。（一部抜粋）
「倭女王卑彌呼與狗奴国男王卑彌弓呼素不
和」
察するところ、倭の女王卑彌呼は、
男王・卑彌弓呼・素と和せず、
にあげく、心痛の毎日を送つておられたので
あうう。（追つて詳ボいた）
やがてついに素戔鳴命は、天上の国に居座
った。そして事ある毎に、天照大神（日御子

の御心をなやませた（神代紀上「第七段へ素
多賜命の無状い為行」参照）
さて、常陸郡の新太王頼の着任を祝うと
とも、黄幢を携えて下向する所と
使者を迎える為「トローロー倭国は誰かを
常陸郡へ遣わさなければならぬ。
誰か適任であらうか。
本来なら
へ難升米か、常陸郡へ赴き、一使者（黄
幢を奉じる使者）を倭国の都へ案内すべきで
あった。✓
といえよう。
だが、かつての妻「日御子の御為と思ひ
梯儻を訪ねていったもの、梯儻はす
でに死んでいった。
へ梯儻が「もはや生きていない」✓
と知った難升米は「どんなに驚き、失望し、途
方に暮れたことだろうか。
そしてまた、帰朝して後々倭国の女王日御
子のすっかり落胆させた御様子を迎え見
るにつけても「トローロー難升米はいたたま

如心痛如
 ⑤ 1245⁺
 夜み苦連

コクヨ ケー20 20×20

そは 個 元1313 かなわら

短時日 大臣 紀上328 名代 2137 武内宿禰 紀上248 2182 元965 日 武内宿禰 紀上248 2182 元965 日

「三〇五」 藤原(五)-590 又165P-1

先述のように

もしも 戴斯烏越(武内宿禰)が女王の直近に遠い魏国の都コ洛陽へ朝貢するのは難いかううや

しかし、九州からさほど遠くない帯方郡へ礼をつくしに行くのに、そんなに多大の時間を要するわけではない。

ともあれ、大臣武内宿禰(仲哀紀九年条参照)が、帯方郡へ赴き、太守王頌に拜謁して新任

の喜びを述べ、塞曹掾史張政らを案内して、魏国の天子の短時日のうちに帰朝したの(であらう)と想

像される。不魏志倭人伝の正始八年(二四七)条には

こう記されている。其八年、太守王頌到官。倭女王卑彌呼、

與狗奴國男王卑彌呼素不和。遣倭載斯烏越等、詣郡說相攻撃狀。遣塞曹掾史張政等、因齎詔書黃幢、拜假難升米、為檄告喻之。

この記事に照して

種々の見解がある。この物語では次のよ

「岩波文庫」四三七〇、五二一三頁。「女王国の出現」小林行雄文英堂、二九八―九頁等参照

元 219
1364
2182
2184
2188
2194
2198
2204
2210
2216
2222
2228
2234
2240
2246
2252
2258
2264
2270
2276
2282
2288
2294
2300
2306
2312
2318
2324
2330
2336
2342
2348
2354
2360
2366
2372
2378
2384
2390
2396
2402
2408
2414
2420
2426
2432
2438
2444
2450
2456
2462
2468
2474
2480
2486
2492
2498
2504
2510
2516
2522
2528
2534
2540
2546
2552
2558
2564
2570
2576
2582
2588
2594
2600
2606
2612
2618
2624
2630
2636
2642
2648
2654
2660
2666
2672
2678
2684
2690
2696
2702
2708
2714
2720
2726
2732
2738
2744
2750
2756
2762
2768
2774
2780
2786
2792
2798
2804
2810
2816
2822
2828
2834
2840
2846
2852
2858
2864
2870
2876
2882
2888
2894
2900
2906
2912
2918
2924
2930
2936
2942
2948
2954
2960
2966
2972
2978
2984
2990
2996
3002
3008
3014
3020
3026
3032
3038
3044
3050
3056
3062
3068
3074
3080
3086
3092
3098
3104
3110
3116
3122
3128
3134
3140
3146
3152
3158
3164
3170
3176
3182
3188
3194
3200
3206
3212
3218
3224
3230
3236
3242
3248
3254
3260
3266
3272
3278
3284
3290
3296
3302
3308
3314
3320
3326
3332
3338
3344
3350
3356
3362
3368
3374
3380
3386
3392
3398
3404
3410
3416
3422
3428
3434
3440
3446
3452
3458
3464
3470
3476
3482
3488
3494
3500
3506
3512
3518
3524
3530
3536
3542
3548
3554
3560
3566
3572
3578
3584
3590
3596
3602
3608
3614
3620
3626
3632
3638
3644
3650
3656
3662
3668
3674
3680
3686
3692
3698
3704
3710
3716
3722
3728
3734
3740
3746
3752
3758
3764
3770
3776
3782
3788
3794
3800
3806
3812
3818
3824
3830
3836
3842
3848
3854
3860
3866
3872
3878
3884
3890
3896
3902
3908
3914
3920
3926
3932
3938
3944
3950
3956
3962
3968
3974
3980
3986
3992
3998
4004
4010
4016
4022
4028
4034
4040
4046
4052
4058
4064
4070
4076
4082
4088
4094
4100
4106
4112
4118
4124
4130
4136
4142
4148
4154
4160
4166
4172
4178
4184
4190
4196
4202
4208
4214
4220
4226
4232
4238
4244
4250
4256
4262
4268
4274
4280
4286
4292
4298
4304
4310
4316
4322
4328
4334
4340
4346
4352
4358
4364
4370
4376
4382
4388
4394
4400
4406
4412
4418
4424
4430
4436
4442
4448
4454
4460
4466
4472
4478
4484
4490
4496
4502
4508
4514
4520
4526
4532
4538
4544
4550
4556
4562
4568
4574
4580
4586
4592
4598
4604
4610
4616
4622
4628
4634
4640
4646
4652
4658
4664
4670
4676
4682
4688
4694
4700
4706
4712
4718
4724
4730
4736
4742
4748
4754
4760
4766
4772
4778
4784
4790
4796
4802
4808
4814
4820
4826
4832
4838
4844
4850
4856
4862
4868
4874
4880
4886
4892
4898
4904
4910
4916
4922
4928
4934
4940
4946
4952
4958
4964
4970
4976
4982
4988
4994
5000

2,165^{P-2/2}

106 157
2162
2164

うに考えてみたい。
其の八年(二四七)、太守王頎官に到る
倭の女王卑彌呼、狗奴国(東の狗奴国のこと)
であらう。男王卑彌呼素(卑彌呼素の
誤りであって、素戔嗚尊のこと)か)と和せず
倭、載斯鳥越(載斯鳥越の誤りで、武内宿禰
か)等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を
説く。塞曹掾史である張政等を遣わし、因
て詔書・黄幢を齎らし、難升米に拝假し、
檄(さとりぶみ)を爲りてえを告諭す。
と、いった意味であつたらうか。
図 恐らく、張政等が倭国の都へやつてきた
時、倭国の女王卑彌呼は引見も出来なほど
病み臥していたのであろう。
そこで張政等は、卑彌呼に代わって率善中郎
将である難升米に拝假し、并びに詔書・黄幢
を齎らしたのではなからうか。
・なお、倭の女王卑彌呼と男弟素戔嗚尊との
仲が悪化していることを憂えた帯方郡太守王
頎が、口檄(口へさとりぶみ)を爲って張政に
託し、(二人)を告諭したのでらうと思われ
る。

休日
→ H4.21(土)を

せいしやく
政局 1218
政界のなにか

改行

2,167^P-1/2

で、魏国は檄を爲ってえを告諭した
と解されてゐるようである。(「岩波文庫」四
三七〇、岩波書店、五二頁注二等参照)
しかし、魏国と匈奴国との間には何の関係
も無さうなのにな
「魏国が、倭国と匈奴国二国間の闘争状態
を和解させようとして」告諭した
というのは理解ににくい。
●匈奴国が、敵対倭国の同盟国である
魏国の告諭を、すんなり受け入れる
などということがあるのだろうか。
●魏国としては、告諭するのでなく、倭国
が勝つように、大いに激励すべきところ
であろう。

●男にいても、帯方郡から遣わされて来た
客人張政等は、その後長らく倭国内に留ま
っていたようである。
●その間に、倭国の政局は目まぐるしいばかり
に流転した。次のように解決してみたい。
「卑彌呼が死んで、男王へ素、つまり素戔
鳴尊であらう」が立った。とはいえ、倭国中
が服さず、更々相誅殺し、当時千余人を殺す

⑦ $2165^{\circ} - \frac{1}{2} 158$

コクヨ ケー20 20×20

こ

2420^P1844

2,168^P-1/2

変転 かかりうつると
流転 移りうつること

考えられる。
その間に倭国内の状況は、目まぐるしい
ばかりに変転した。
大略、次のように解釈してみたい。
卑彌呼が死んで、男王曰素（つまり素
中が服さず、更々相誅殺して、当時千余人を殺
すほどの激戦が展開された。
しかし卑彌呼の宗女（長女）臺舉（田心
姫）が十三歳が王となつて、国中は遂に定ま
った。
ここに張政は、曰檄（さとりぶみ）を以
つて臺舉を告諭した。
もつとも、正始八年（二四七）条の「檄
と、この折の「檄」とが同一だったのか否か
に、ついては、明らかでない。

（1）あるいは、
倭の女王卑彌呼と、男王（素）とが和せ
ず、倭国が不安な情勢にあることを戴斯烏越

2.168^D - 2/2

次頁から

（武内宿禰）から聞きた、帯方郡太守王頎
 が、姉回弟習の争いを止めるように
 と、「檄」を爲つて塞曹掾史張政に持たせ
 た。正始八年（二四七）張政は、難升米に拜
 受て詔書曰、黄幢を齎し、「檄」によつて
 告諭した。その「檄」が、倭国の新しい女王として立
 った臺舉（田心姫）に、いま再び伝えらる
 た。

（2）いや、政等下檄（ふくふみ）を以つて壹舉を告
 諭す。とあるところを見ると、正始八年（二四七）
 条の「檄」と異なる、もう一つの「檄」が有
 った。魏国陣營の一翼を担う倭国が、
 今後どのように対処すべきかを

次頁から.

$2.170^{\circ} - 1/2$

あ 2/58 4斤へ
OK

梯^{てい}僦^いの死^し

先^{せん}述^{じゆ}の通^{とお}り、魏^ぎ志^し倭^わ人^{じん}伝^{でん}の正^{せい}始^し六^{ろく}年^{ねん}（二^に四^し）

五^ご条^{じょう}には、

其^{その}の六^{ろく}年^{ねん}下^か詔^{みことのり}して倭^わの難^{がた}并^ひ米^{まい}に黄^{きう}幢^{どう}を賜^{たま}

い、郡^{ぐん}（帯^た方^{ほう}郡^{ぐん}）に付^つして假^{かり}換^かせしむ

と記^きされてい^いる。

戦国・ようや
風貌(ふうぼう)であつたうか?
きと 元541
帰途(かきみち)

2170^P-3/2
と

← 2158^P 2160^P 末

前頁

難升米が魏国(魏)の朝貢(ちょうこん)に赴(おもむ)く時、魏の天子は景初三年十二月の先例(せんれい)とほぼ同様(どうよう)に詔(みことり)して、
「倭(やまと)の難升米(なんしやうまい)に黄幢(きうどう)を賜(たま)ひ、郡(ぐん)に付(つ)いて假(かり)授(い)せしむ」と表明(ひやうめい)した。
(魏国の黄色(きやうしき)の軍旗(ぐんき) ↓ 2158^P 125^行)
(伊聲耆振(いせいしき)振邪(しんじや)狗(こ)の朝貢(ちょうこん))
なお、この正始六年(せいし)の朝献(ちやうけん)も、前二回(ぜんにかい)景初三年(けいし)十二月(じふにがつ)、正始四年(せいし)十二月(じふにがつ)と同じく下(くだ)さて、年(とし)が改(あらた)まつて翌(あした)正始七年(せいし)年(ねん)(二四六)を迎(むか)えたとき、難升米(なんしやうまい)は帰途(かきみち)についた。
三年前(さんねん)の正始四年(せいし)年(ねん)(二四三)に伊聲耆振(いせいしき)振邪(しんじや)狗(こ)(月読命(つきよのみこと))とともにやつて来てそのまま洛陽(らくやう)内(うち)に留(とど)まっていた遣魏使(けんゑいし)(多分扶余系(たぶんふよけい)殷民(いんみん)の子孫(こそん)連(れん)や魏国(ゑいこく))の朝廷(てうてい)の役人等(やくにんらう)に見送(みおく)られて、難升米(なんしやうまい)は花(はな)の都(みやこ)洛陽(らくやう)を後に(あとに)した。
黄河(かうが)の流れ(ながれ)をゆつたり下(くだ)つて行くその狗(こ)の雄(お)豪華(かうか)な船(ふね)の中には、魏国(ゑいこく)を象徴(しやうてう)する黄幢(きうどう)を

宇治橋
4803

お持ち 3291
お持ち かあつき

2,171⁹-1/3

→ 560,4.23⑤

泗水は、隅尾山に発源 ②、1/5

おさ
収めた華麗な箱があつた。と違ひない。想像される。

■ 時に、率善中郎將難升米は、こう申し出た。

「私、旧知の者を訪ねてきたいと存じます。

すぐに歸つて参ります故、いましばらくお待ち下さい。」

■ へ梯儼殿は、その後どのようにお過しであ

ろうか。

■ 難升米は、玉匣をしっかりと胸にかい抱き

ながら旅路を急ぎ、―――――泗水を溯つ

て、いつて、その匣を手渡すべき人を探した。

て梯儼の故郷へ到り

■ いかしな人と、もはや手遅れでいかなかつ

た。

「あのお方は、お気の毒にもうこの世に歸

らぬ人となつてしまわれました。」

■ 村人達の言葉に、難升米は放心のおももち

で立ちつくした。

米

小林 745

紀上102

大カニ 1621
ネ・ネイ・ナイ・デ

大カニ 320
原の飯 2.171 P 3/3

2136 P-3/3

2136 P-2/3 末
2136 -3/3
カックニ、チヤビ

先にも述べたが、神代紀を見ると、
(1) 中国の保食神(浦嶋が)の許に到った
月読命の報告を聞いて、天照大神は甚しくお
怒りになった
という記事に引き続いた
(2) 是の後、天照大神、復天能人を遣へ、
往きて看しめたまふ。是の時に、保食神、実
に己に死せり
と記されている。(神代紀(上)第五段一書第十
一)
なお、天能人について、こう述べられ
ている。
「クマは、神に奉る米。和名抄に曰精(私
呂反、和名久万元彌)精米所以享神也」とあ
る。精は、説文に曰糧也とあり、広韻に祭
神米也とある。解字マヒトは、このクマに奉
仕する人であらう
という。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系
岩波書店、一〇二頁注三参照)

H30(2018)5.31(木)~6.1(4回)
令和元(2019)6.26(水)~6.27(3回)

2.17/1-3

① 2135[↑]
② 2136[↑] 3/3 紀上112[↑]

くまひと
肥人

F²/₂₇
6/26

なるほど定かでないか、
へ天能人(祭神米に奉仕する人)とは、
升米(中臣連の遠祖天兒屋命)の(こ)となので
あろう✓
と考えてみたい。(第三十一章へ女王日御子
の嘆き✓の項において既述)

*

漁師 1591
魚色 24584
(ぎしへ)

紀上 497
2175-3/3 260.4.24
改行 2,172

見聞 718
持信と張政の事後
(2488-3/2)

三山の歌

梯儔の晩年は悲しく辛いものであった。

しかし梯儔は倭国にとって掛替のない事績を遺した。

倭国のことを記した梯儔の報告書に見聞録

は、その後幾多の誤写・誤認・削除・追加・並らべ

替え等があったにせよ

れ、魏志倭人伝など多くの史書にその大要が記録

されて下りて現代に伝わり我が国の文献学上の起

点ともいいうべき第一級の資料となった

また、倭国の人々は、梯儔が本土で亡

くなつてからのちも、彼の人の人徳を慕い、

懐かしく想ひ起すのだった。さうして梯儔は

倭人達から深く愛され続けた。爽やかな風流之士と

して敬愛され続けた。

幾百年の年月が流れていゝた。

もつとも、伝承として口から口へ語り継がれ

ていくうちに、梯儔にまつめる物語は、

次第次第に、日瑞江の漁師(魚色家)、す

なめち、日瑞嶋子の伝説として美化され、単

純化されていったものと思われる。

タクマガ原の三山のうちの人々は、梯儔の姿を

タクマガ原の三山のうちの人々は、梯儔の姿を

21-17^P
夫 次
315

④ 2050^P, 4659^P, 4700-3/2
20-17^P 2,173^P

20-37^P 1921^P
2174-3/2 2899^P

え **瑞江浦** の小丘を **瑞江浦** の小丘と
山とか、**梯儼山**とか呼んでゐたので
とはいえ、**瑞江浦**の頃からか、訛って、戸と
島山と呼称するようになった、と想像される。
とある。
と山さびいます
畝火のこの瑞山は日の緯の大御門に瑞山
戸島山に相当する畝火山は、**瑞江浦**の梯
儼山の瑞をとって、**瑞山**とも呼ばれるこ
とがあつたのであろう。
また、万巻一三に
高山(香具山)は畝火雄々しと耳梨と
相あらそひき神代より斯くにあるらし
古昔も然にあれこそうつせみも
あらそふらき
と歌われている
次のような意味であらうか。
13.5
香具山(女王卑彌呼)は、**夫**である
畝火山(梯儼)を男らしく立派だと感いて、
その愛を得ようと、耳梨山(この物語中の赤
女)と相争つた。神代からこうであるらしい。昔もこ

ひこうは... 夫 1498 夫を愛いつ

緊密 608

「住吉大社」144 2,174-1/6

大和 417 大和 126 最修 最修 2323

のようであつたからこそ、現世でも、
愛を二人で争うことがあるものらしい。
なお、夫と婦とか、言外に関連づ
けられてゐるように思われる。

なるほど、瑞江の梯儺と、瑞山の
儺とを結びつけるのは、かなり強引
な感がある。

しか、瑞江の住吉大社の祭礼を見ると、
住吉大社と、畝傍山との間の緊密な係

りが伺える。
全国の神社で、祈年祭と新嘗祭は特に厳修
されておられ、いまでは普通、祈年祭は二月十

七日、新嘗祭は十一月二十三日に行なわれる。
この両日、住吉大社でも、宮司以下参籠齋
斎の上、厳重な祭儀を執行する。

ここに、特筆すべき行事がある。

祈年祭・新嘗祭の祭日に先だつて、祭器の
料となる埴土を、大和の畝傍山へ採りに行く
のである。埴使といひ、恒例の神事とな

204 雲梯山

からびつ 雲梯 467 雲梯 2109 雲梯 2149

2,174 P-2/6

雲梯 2109 雲梯 2149

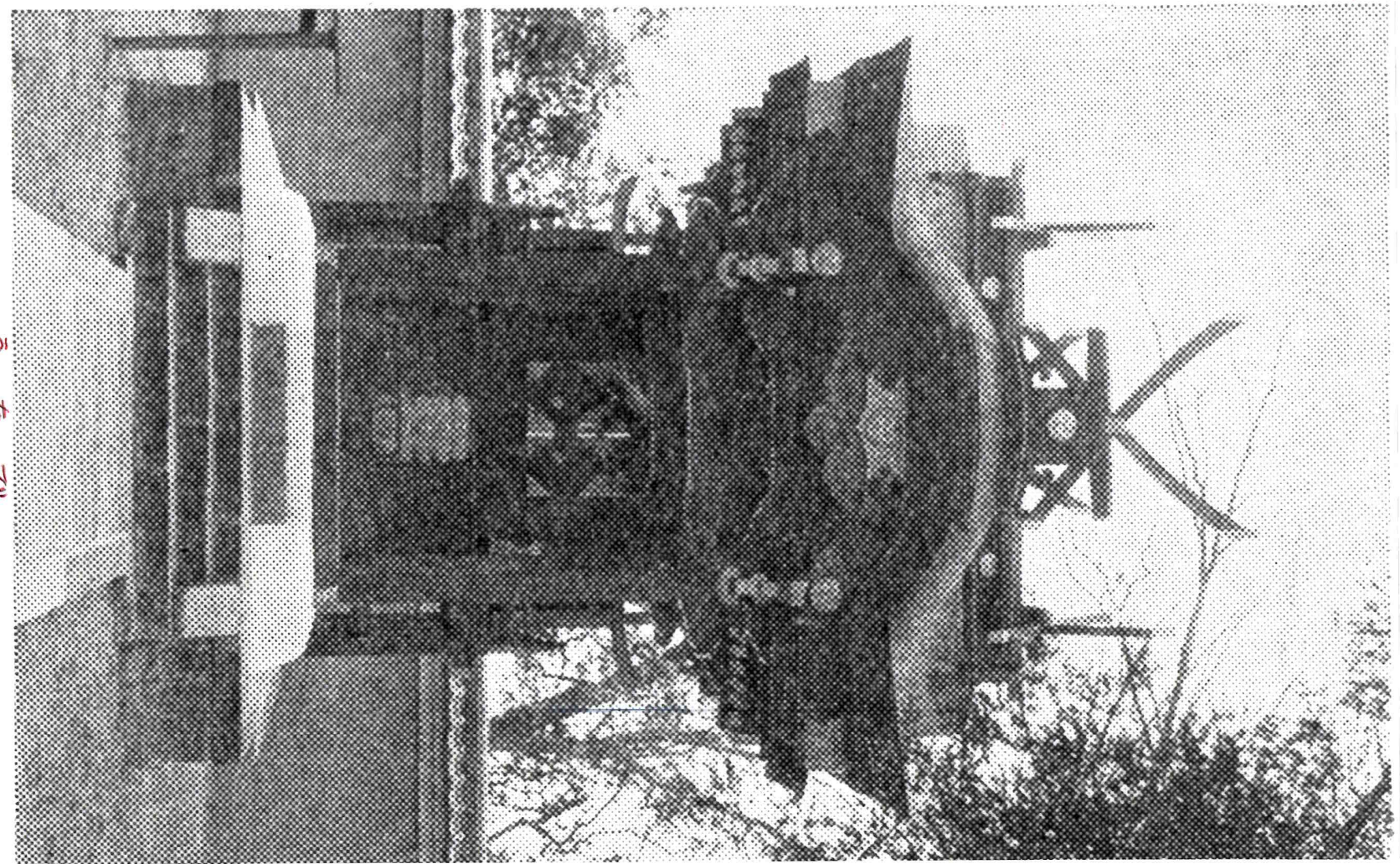
雲梯 市町村字 149 雲梯 1458 雲梯 149 雲梯 149 雲梯 149

新年・新嘗祭のおよそ十日余り前、佐吉
大社では、正・副両使、および箱持よりなる
一行が、早速神前を拝して、大和の畝火山西
麓にある畝火山口神社に向う。いまは自動車
または電車を利用するが、むかしは騎馬であ
った。それ以前は、あるいは手輿に揺られて
いったのではなからうか。
ところ、この「埴使」の一行は、畝火山
口神社に到着する前に、その西北一
五詩ほどの所（奈良県橿原市雲梯町）にある
雲梯神社に、必ず立ち寄る。
なお、
① 雲梯と、梯偶とは、切っても切れない
係わりがあると考えられていたのだから、
② そこで、梯偶の「梯」の字に因んで、
名梯神社と名づけられたのではなからうか、
と定かならない。とながら想像される。
雲梯神社の祭典がおわって、一行は畝火
山口神社に到り、正使以下祭典奉仕の上、畝

また因みに述べると「畝火山」とも「畝火山」とも「雲梯山」とも

・右頁の右に ↑ 加付
載せらる。

2,174^P-3/6



↑ 加付

477

↓ 加付

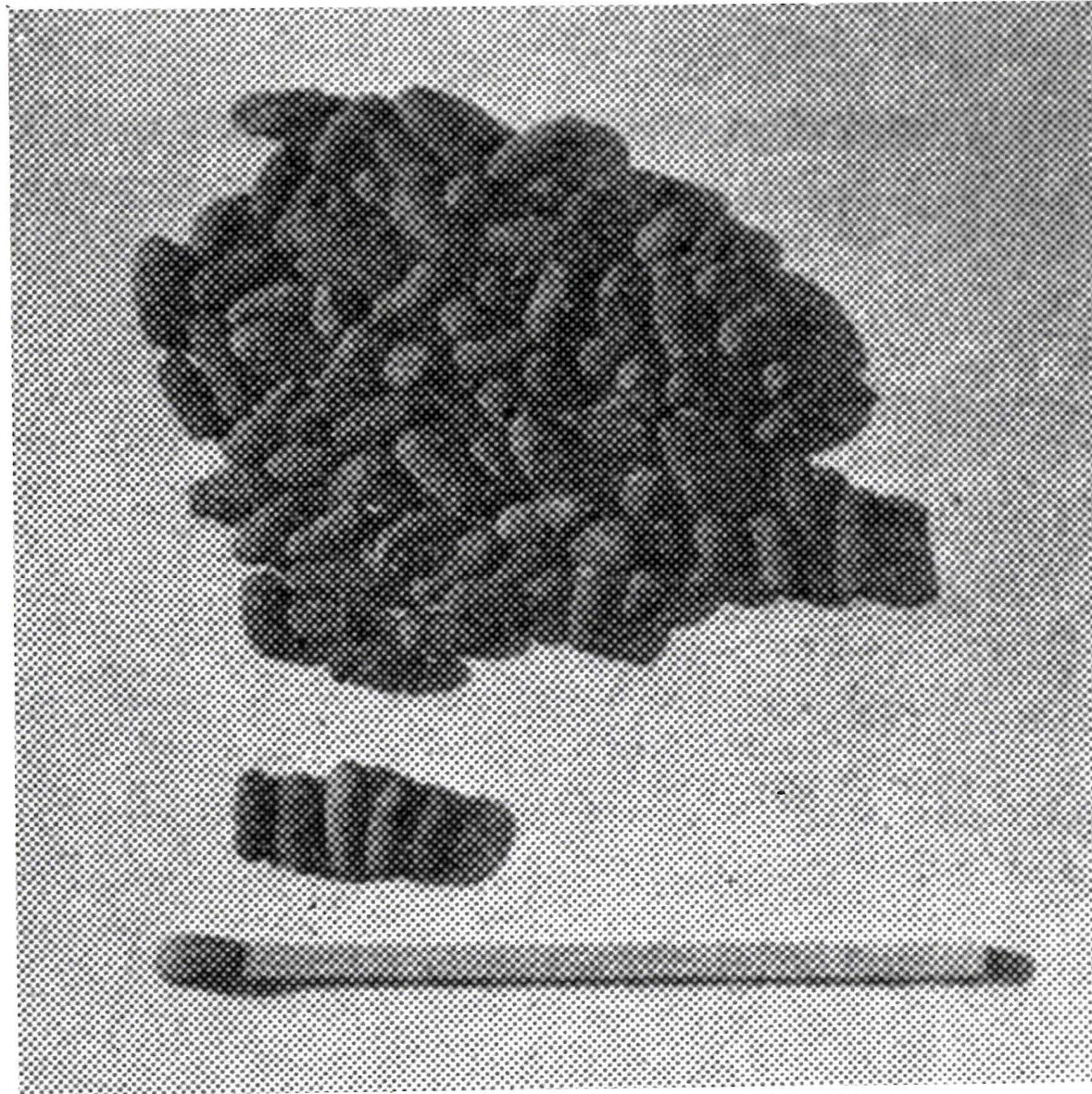
↑ 加付

1304 1404 写真図版 365 雲名梯神社
『住吉大社』 西本奈 学生社 昭和52年5月20日発行 146頁参照

2,174^r-4/6

・右頁左上(1/4頁)に
載せる。

(本には、マナ棒の長さ
3.2 cm で掲載されて
います。)



136g

140g

写真図版 366

うね びやま はにつち

畝火山の埴土

『住吉大社』西本泰

学生社

昭和52年5月20日発行 149頁参照
478

2,174^P-5/6

カット
↑

・右頁の下半分に、
大きく載せる。



カット
↑

1309

（K1）おとやたか

1409

写真図版 367

うねびやま

畝火山口神社

『住吉大社』西本泰、学生社、昭和52年5月20日発行、145頁参照。

$$\begin{array}{r} 10\% \\ 21 \end{array} \quad \begin{array}{r} 10\% \\ 21 \end{array}$$
$$2,174^P - \frac{6}{6}$$

カン 438 カン 1686
 団 粒
 吳漢 吳漢
 タ タ リ
 ニン 7

じんく 小林 2174
神供 705⁰ - $\frac{3}{16}$
..... 神へのさなえもの

からびつ 元
唐櫃 467
平会 1901

あみいろ
墨色電回
左人右電回

うす
淡い ④
うすみ 大の
淡墨 1338

傍山頂に登り、古来の聖地で埴土を採る。
 古法では、^{ナカミ}「柵の葉を口に含んで身を清め
 土を取る事三搦半」となっている。
 埴土は淡墨色米粒状の団粒で、これを小唐
 櫃に納めて歸社する。西度ともに平食へひら
 たい土器の皿をつくり、神供の祭器とする
 (写真目版 365 366 367)

(一住吉大社、西本泰、学生社、一四四一
 五〇頁参照)

祈年祭
 および
 新嘗祭
 の

同系
③ 3059^P - 4% ④ 2176^P 25% のみちま 25% 176^P ⑤ 3059^P - 3/11

145
 44 1026
 唐制の年板
 素禪 120

Handwritten notes on the left margin:
 467
 P534 2362
 女漢 | 陰漢 |
 墨 | 大 |
 (Y)

外7回 1608^P
初色 584^P

に
ほ
の
性
神
232^P

2,175^P - 1/8

裸ひな
外つ国からやつてきた梯儼は、結果のみ見
れば「女から女へ」渡り歩いた通色家であつ
たとも言えよう。
こうしたことから後代の人々は住吉に住
んだ梯儼を好色な男」として思い描くようになつ
たのもと思われる。
住吉神社では、「裸ひな」と称する素裸の男
女の人形を売っている。男が笏を男根のよう
に挿げ、お雛さまが女陰象徴の扇をひらいて
持つ土焼きの人形である。(宝真図版 368 参照)
この男女の「裸ひな」は、あるいは梯儼と
赤女の姿を表わしているのであらうか。
なお、女には額に二つの小突があつて貴人
であることが示されている。しかし男の額には二
つの小突が描かれていない。倭国の貴族の出
大伯の子孫でないことを示唆しているのかも知れない。
住吉神社境内末社の「種貸社」は、倉稻魂命
(稲荷神)を祭神としていている。
もし「種貸社」の祭神は、俗に「種貸さん」
の使である狐に見たてているのであらうか。

2,175P-2/8

・左頁の右上(女貞)に
大きく掲載下さい。



すき
神社
1678
265P 18/8

14 写真図版 368 [大阪] ^{すき}佳吉神社の ^{はたか}裸びな

12 | ・昭和60年10月31日入手。

9 | ・写真館にて撮影。

既フタ2タシタ

482

H31(2019)2,3 冊入手。

2,175^P-3/8

・左頁の左上(本頁)に
大きく掲載下さい。



1409 写真図版 369 [大阪] ^{すみよし}住吉神社の ^{こやす}子安人形

1209 平成7年6月6日入手。

9 写真館にて撮影。

↑
電7オ1242オ

483

頭 1189

2,175^P - 4/8

求めて歸る女性が多い、という。(「につぼんの性神」九重京司、けいせい出版、二三二頁参照)

と呼ばれ、親しまれており、子供の欲しい人が祈願して願う効験があるという。

種貸社では子安人形という陶製の人形を授けている。高立五弱、ふさふさした黒髪を束ねた女が、燃えたつような真紅の湯巻だを腰につけ、色白の豊かな上半身を裸にし、可愛い赤ん坊を腕に抱いている。姿は、婦人の憧れともいえる。(写真図版 369 参照) 微笑ましい。

子安人形は、愛姫とその子とを思わせる。ようには思ひ、母親の顔に二つの小突高眉、天井眉、などという加無い。後代には、眉を剃り落し、その上に口墨、二つの円点を描いたという。(「広辞苑」へ高眉参照)

あるいは、湯浴みして、円点が消えたところを描写しているのだろうか。

住吉神社ではその他に、「睦み犬」や「睦み猿」といった交尾している焼物を売っている。昔は神馬飼育所で、色づけた一物を露呈した土焼きの神馬人形も授けていた。

とにかく、この神社は、性的人形の豊庫である。こみちは素朴で土俗味があり、強い信仰で

天つき
改訂

2.175^p 5/8

猫か・狐か

13.5

コサ

住吉大社第一本宮の東側には、
三狐神を祭神とする。楠君社がある。
毎月、初辰の日が祭日であるところから、
辰さんと呼ばれ、この日は参詣で賑わう。
福猫を受け、月詣りをする人は、社頭で招
る。

・「まねき猫」だが、初辰さんの「まねき猫」

はちよつと変わっており、祥をつけ、招いて

いる手は月によつて左右交互に上げる。

という。(写真図版 370) 住吉大社に西本泰

学生社「昭和五十二年五月二十日発行」二〇

六(八頁参照)

*

カット ←

2,175 - 6/8

→ カット

頁の上半分に
掲載下さい。

カット ↑

招き猫



↑

カット ↓

↓

13QQゴ4

半字片

14QQゴ4 中にありわけ

写真図版 370

住吉大社

なんぐん

楠 珪社

まね

きつね

招き狐 (?)

『日本の古社』

住吉大社 三好和義・岡野弘彦ほか

淡交社

平成16年3月12日発行 65頁参照

486 P.

$$2.175^P - 7/8$$

改行

日本のものはいわゆるへきつね色で、
 極めて賢く頭のうへに雑草を乗せ、
 中に沈めたまま鴨の群れに近づいて捕えたり、
 ウサギのいるそばで苦しそうに転がりまわり、
 ウサギが好奇心を起して近寄ると、不意に飛
 びついて捕えたりするから「だます」
 というのは嘘でない。

日本書紀や続日本紀によると、
 は初め瑞祥動物として尊重された。和銅五年
 (714)には伊賀国から黒狐が献上された。

天下太平のしるしとされた。
 三狐神を、稻荷大明神として信仰するよう
 になった。云々

という。「世界大百科事典」平A社、一九
 七八年印刷。下へ狐参照

ところで、こう説き及ぼす
 吻(口)周辺部が細く尖り、瞳は明るい所
 では猫のように針状となる。夜出て、昆虫、夜果
 うサギ、キジ、カモ、カエル、
 などを食う。

昆虫、夜果、
 体色は

H30(2018)6.1(金)~6.2(4回)
 H31(2019)1.21(木)~1.22(3回)
 令和元(2019)6.28(金)~6.29(3回)
 令和2(2020)2.4(火)~2.6(4回)

2175^P-8/8

2/6 17/5
 2/5

あえて述べる、
 三狐神を祭神とする、
 ねき猫は、本래、狐、
 を表わしていたのかも知れない、
 などと想像される。
 三狐神が、格式の高い、
 上に雑草を乗せている様子を表現しているの
 ではなからうか。
 ・「まねき猫」のように、座って、
 足を挙げるようになったのか、
 のか、それとも大昔に遡るのか、
 とについては分からない。
 *ともあれ、写真図版 370 は、
 へ狐か、猫に化け、
 座って片方の前足をあげている、
 ところを、示しているように思われる。